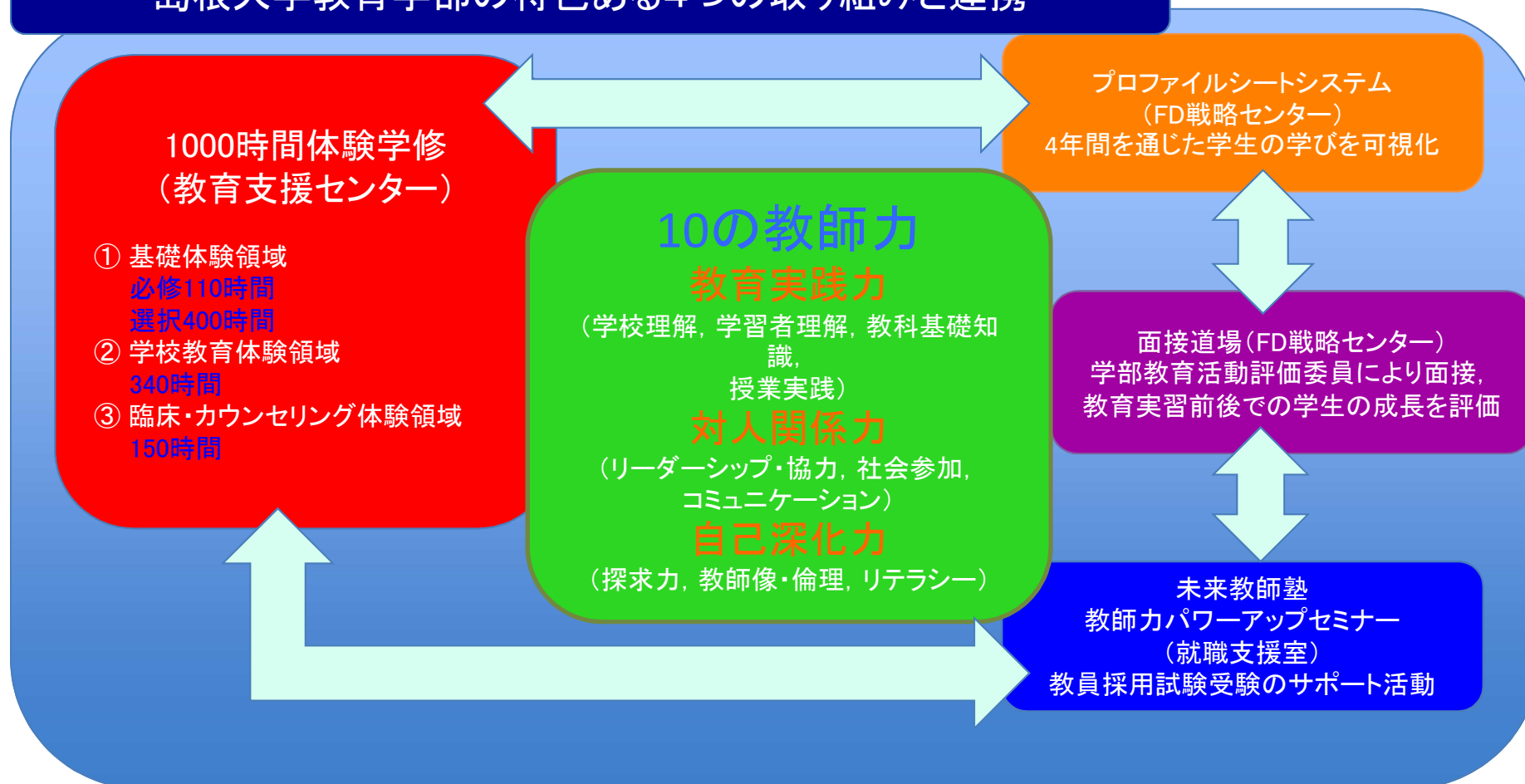


島根大学教育学部における教員養成の取組

資料3-1
(島根大学教育学部①)

○島根大学教育学部では、21世紀の学校教育を担う教師に必要な資質・能力として「10の教師力」を定め、全ての教育活動を通じて、この「教師力」を育成し、「豊かな人間性と実践的な指導力」を備えた教員の養成を目指している。
○「1000時間体験学修」プログラムは、教員養成学部としての理論的学習に加え、「多様な体験活動を通じてこそ、高度な教育実践力を培える」との観点から、必修として導入している。(平成16年4月より)

島根大学教育学部の特色ある4つの取り組みと連携



1000時間体験学修の基礎体験活動領域

資料3-1
(島根大学教育学部②)

大学内での活動

必修体験(110時間)

入門期セミナーI・II
スタートアップセミナー
充実期・応用期・発展期
セミナー

学部主催の
体験プログラム

面接道場
プロフィールシート
未来教師塾

学生

大学外での活動

教育委員会・学校・
地域社会との連携

支援センター専任教員による
事前・事中・事後指導

選択体験(400時間)

学校体験

(学習支援活動, 学童保育,
部活指導等)

社会教育施設

(キャンプリーダー, 施設イベント企画
運営等)

実習semester体験

(3年後期)

(幼・小・中学校における
平日学習支援)

島根県・鳥取県
公立小中学校
特別支援学校

社会教育施設

各種団体

島根大学教育学部における教員養成の取組
 - 「1000 時間体験学修」における基礎体験領域（学外体験活動）を中心に-

島根大学教育学部長 小川 巖
 附属教育支援センター長 川路 澄人

【発表概要】

1. 島根大学教育学部の特色ある教員養成の取組み
2. 教育支援センターの概要と「1000 時間体験学修」のシステム
3. 基礎体験活動の実施状況
4. 基礎体験活動に関する評価
5. 基礎体験活動と教職志向性（進路）との関係
6. 基礎体験領域の成果と課題

【説明資料】

1. 島根大学教育学部の特色ある教員養成の取組み（別紙ポンチ絵1参照）
2. 教育支援センターの概要と「1000時間体験学修」のシステム（別紙ポンチ絵2参照）

「1000時間体験学修」の運営体制：教育学部附属教育支援センター

センター長（学部教員兼任）1名 学部兼任教員 11名

専任教員4名（島根県現職教員交流派遣2名，鳥取県現職教員交流派遣1名，臨床心理士1名）

特任教員2名（島根県退職校長1名，学生サポート・時間管理担当1名）

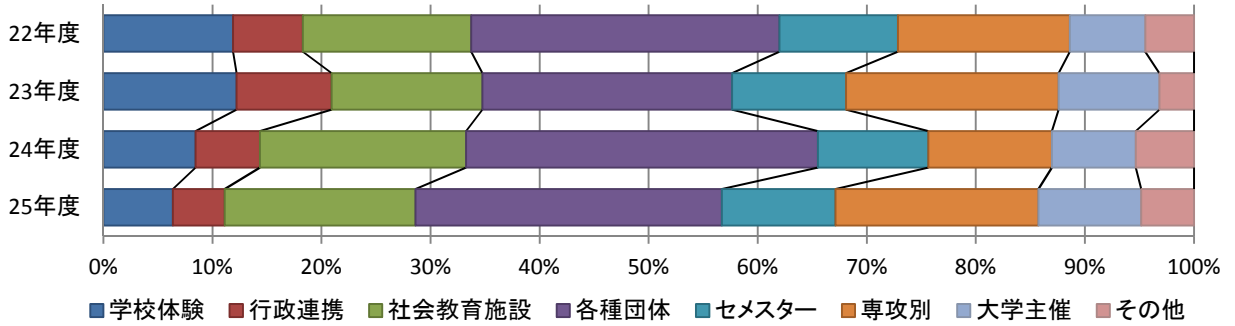
「1000時間体験学修」の時間配分

	必修時間		選択時間
体験領域	基礎体験領域 (入門期セミナーI/II, 基礎体験セミナー, 介護等体験)	110	400
	学校教育体験領域 (学校教育実践研究 I/II, 学校教育実習 I~IV)	340	
	臨床・カウンセリング体験領域	150	

3. 基礎体験活動の実施状況**基礎体験活動への参加実績**

	H19	H20	H21	H22	H23	H24	H25	H26
受入れ団体数	225	226	266	295	277	266	244	206
募集活動数	396	451	475	504	511	508	496	443
学生参加活動数	341	338	340	375	400	348	370	258
参加学生延べ数	2012	1898	1953	2397	2478	2292	2469	2396

参加内容別活動時間の推移（卒業年度）



近年の基礎体験領域の体験先

タイプ	具体的な体験活動名
A 学校体験（幼稚園・小学校）	島根大学教育学部附属小学校全校活動【ディスカバー松江】の引率、松江市内公立小学校における学習支援活動、松江市内公立、私立幼稚園での保育支援活動、伊野小学校3、4、5年生宿泊体験学修、米子市内公立小学校における学習支援活動、加茂小学校5年生宿泊研修補助、地域人材（大学生）を活動した学校支援
B 学校体験（中学校・高等学校）	島根大学教育学部附属中学校ステップアップ学習会、境高校スクールプロジェクト、松江第二中学校第2年生学習支援活動、加茂中学校3年生学習支援、松江市立女子高等学校支援活動、島根県中学生ものづくり競技大会、蔵木中学校活動支援、夏季休業中の学習支援活動（松江市立湖東中学校）、日本語指導、海士中学校「普通の生活学校・職場体験ウィーク」支援活動
C 学校体験（特別支援学校・学級・通級指導教室）	松江市内公立特別支援学校における学校学童クラブ、わくわくけんべい、松江養護学校活動支援、特別な支援を要する生徒に対する個別サポート、米子市内公立特別支援学校における学習支援活動、松江市内公立中学校における特別支援学級の活動支援、清心フェスティバル、松江養護学校PTAサマースクール、
D 行政連携事業（放課後・休日の活動）	米子市学習支援ボランティア事業、やすぎ子ども探検隊、松江サタデースクール、出雲市ウィークエンドスクール、松江市青少年支援センター学習支援活動、つくる楽しむわかる科学教室、幸雲南塾、四季を楽しむかわもとウォーキング、子ども会リーダー研修会
E 社会教育施設での体験	ボランティア集会、春の親子フェスティバル、ボランティア活動入門セミナー、サン・レイクフェスティバル、サマーチャレンジ、キッズチャレンジ、にんにんチャレンジ、船上山スキルアップセミナー、さんべ祭、さんべ夢ステージ、古代体験インストラクター
F 各種団体での体験	子ども書道クラブでの指導サポート、松江赤十字乳児院支援活動、ジュニア吹奏楽乃木ドリマーズ支援活動、出雲の子リーダー養成研究会、おやこ劇場松江センター、くにびき森のようちえん、伊野ベーション、こども自然体験合宿、ことばを育てる親の会、持田フットボールクラブ
G 実習セメスター体験	大学3年生の後期を実習セメスターと設定し（このセメスターは附属学校園での4週間におよぶ教育実習を実施するため、大学での通常時間割での講義を履修できない）、教育実習以外の期間の平日昼間に島根県、鳥取県内（主に松江市、米子市を中心として）の幼稚園、小学校、中学校において保育・学習支援活動を行う。
H 専攻別体験	別表参照
I 大学主催の体験プログラム	発達障がい児童の学習支援、島大ビビットひろば、知的に障がいのある人のオープンカレッジ、オープンキャンパス、だんだん塾、島根大学教育学部ホームカミングデー、環境寺子屋、高校生の大学訪問説明会の補助、中国五大学学生競技会、入門期セミナー I 学生スタッフ
J その他の教師力向上のための体験	プロフィールシートへの自己評価入力、面接道場

各専攻の専攻別体験活動の名称・内容

専攻名	具体的な専攻別体験活動の名称・内容
初等教育開発専攻	大谷小学校・幼稚園スクールサポーター事業、初等教育開発専攻チューター活動、中山間地域教育実践研究、初等教育開発入門講座（読書会）
特別支援教育専攻	たんぼぼまつり、1・2回生研修会、子どもから学ぶ発達・教育研究実践セミナー、スプーンの会、
心理臨床専攻	附属小学校保健室における教育臨床（メンタルフレンド）
言語教育専攻（国語教育コース）	自主ゼミ活動、日本文学実地踏査旅行、公開講座運営活動、文学教材の舞台・場面の体験的学修、国語教育コース 体験学修基盤整備合宿研修旅行、教育学部オープンキャンパス企画運営
言語教育専攻（英語教育コース）	附属中学校 English Day、英語コース基礎体験セミナーI、英語教育コース基礎体験セミナーII、島大ビビットひろば、シェイクスピア読書会
共生社会教育専攻	江津市金田町聞き取り実践、「人生の先輩」に対するインタビュー実践、江津市黒松港祭り、歴史教育実践研究、オープンキャンパス企画運営、島根社会科懇話会研究大会への参画
自然環境教育専攻	ジオパーク探訪会サポーター、城西まつりでのジオパークの企画・運営、自然環境教育の富士登山、自然環境教育専攻へ進みたい人の勉強会
数理基礎教育専攻	高等学校数学科内容の教材研究と実習、数学の学習方法ワークショップ、数学科内容の論理的教材研究
人間生活環境教育専攻（家政）	住まい分野臨床活動、地域食材を活用した食品開発・教材化の実践研究、家庭科とその実践活用講座
人間生活環境教育専攻（幼児）	保育臨床体験、保育知とその実践活用講座
健康・スポーツ教育専攻	スポーツテスト補助員、現職教員による保健体育科教員を目指す学生への特別講義、島大ビビットひろば、北浦臨海水泳実習
音楽教育専攻	学校音楽活動支援、学校・施設等訪問・慰問演奏活動プログラム、各種音楽活動支援・体験活動、演奏会・学会等企画運営活動、学外セミナー・講習会等参加活動
美術教育専攻	みんなでつくろう福光石彫ワークショップ、島根県立美術館ワークショップ

4. 基礎体験活動に関する評価

（1）基礎体験活動に関する自己評価アンケート結果（平成26年度）

基礎体験活動の自己評価項目を、プロフィールシートの教師力10軸に合わせた10項目（軸）と、その具体的目標である20項目の評価項目に設定している。

基礎体験領域の自己評価項目一覧	
1) 学校理解	<ul style="list-style-type: none"> ①それぞれの学校や校種の特徴などを理解することができたか。 ②教師の仕事（授業実践・学級経営・校務分掌）を理解することができたか。
2) 子ども理解（学習者理解）	<ul style="list-style-type: none"> ①子どもの発達段階の違いに応じた関わり方をすることができたか。 ②幼児・児童・生徒への支援・指導・相談への対応などが適切にできたか。
3) 教科基礎知識・技能	<ul style="list-style-type: none"> ①学習支援する教科等に関する基礎的・基本的な知識や技能をもつことができたか。
4) 学習支援のための指導技術（授業実践研究）	<ul style="list-style-type: none"> ①学習支援のための基礎技術をもつことができたか。

5) リーダーシップ・協力

- ①状況に応じて意見をまとめたり，リーダーシップを発揮したりすることができたか。
- ②活動の趣旨を理解し，組織や集団の一員として積極的に役割を担ったり，与えられた役割を果たしたりすることができたか。
- ③グループの仲間，教員，地域の方々と協力して活動することができたか。

6) 社会参加

- ①自ら進んで地域社会と関わりをもち，主として学外での活動に積極的に取り組めたか。

7) コミュニケーション

- ①学校や地域の方々と積極的に関わりをもとうとすることができたか。
- ②場や相手に応じた挨拶や言葉遣いなどができたか。
- ③実際の活動場面で子どもの話を聞き，それにきちんと答えることができたか。
- ④体験受け入れ先の方と論理的にコミュニケーションをとることができたか。

8) 探求力

- ①自分の長所や短所，これから伸ばしていきたい能力，克服すべき課題をきちんと把握できたか。
- ②仲間と協力して企画を立ち上げ，実施するところまで責任をもって行うことができたか。
- ③自らの課題や友達と協同する課題などを解決することができたか。

9) 社会の一員としての自覚（教師像・倫理）

- ①社会の一員としての自覚と責任を持って行動することができたか。

10) リテラシー

- ①コンピューター等を活用して，体験に関わる必要な情報を収集したり，体験活動に関する手続きをしたりすることができたか。
- ②参加した体験をふり返り，活動記録票をまとめたり，自己評価を整理したりできたか。

この10軸20項目の自己評価項目で，各セミナーの評価結果を表にまとめたものが，以下の表である。各評価項目とも，その結果を5段階評価の平均値で示している。

（表中のⅠとⅡは，基礎体験への取り組みと有意義感の自己評価結果である）

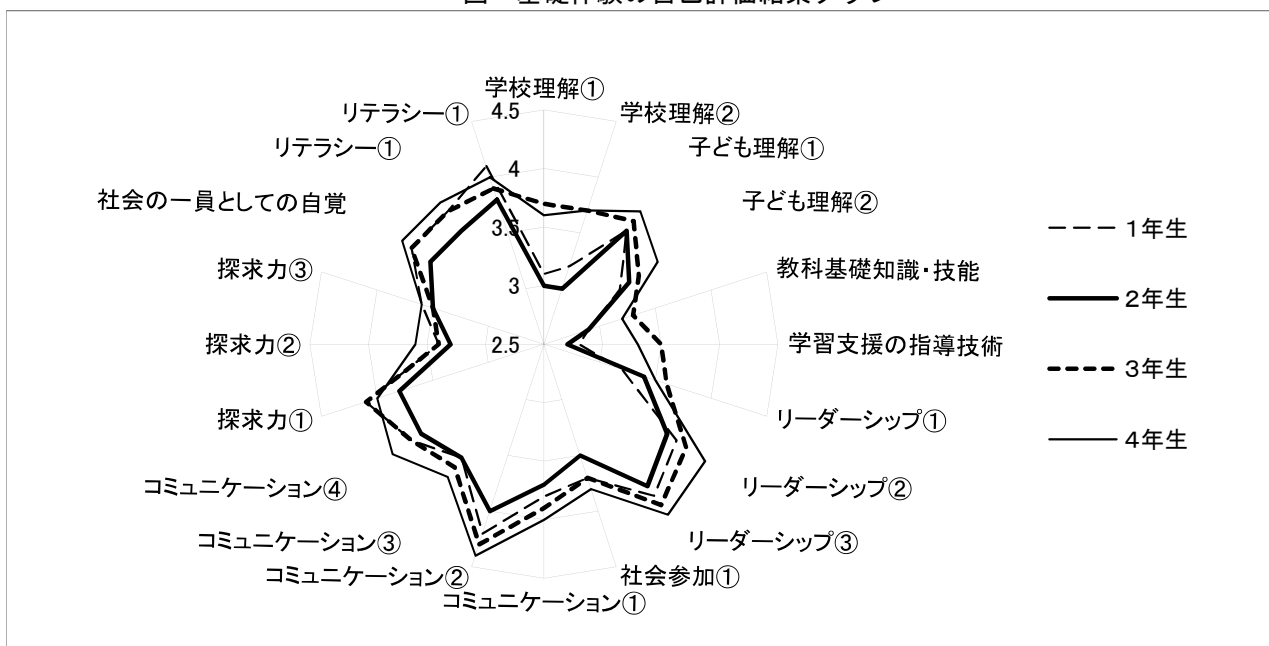
学生の基礎体験の自己評価結果

学年名・評価の実施時期 ・調査人数		5段階自己評価の数値の平均値			
		1年生 2015年2月 171人	2年生 2015年2月 164人	3年生 2014年12月 167人	4年生 2014年9月 163人
	Ⅰ 取り組み	3.4	3.1	3.2	3.4
	Ⅱ 有意義感	4.1	3.6	3.9	3.9
1	学校理解①	3.1	3.0	3.7	3.6
2	学校理解②	3.2	3.0	3.7	3.7
3	子ども理解①	3.7	3.7	3.8	3.9
4	子ども理解②	3.3	3.4	3.5	3.7
5	教科基礎知識・技能	2.9	2.9	3.3	3.2

6	学習支援の指導技術	2.8	2.7	3.5	3.3
7	リーダーシップ①	3.2	3.4	3.6	3.5
8	リーダーシップ②	3.9	3.8	4.0	4.2
9	リーダーシップ③	4.1	4.0	4.2	4.3
10	社会参加①	3.7	3.5	3.7	3.8
11	コミュニケーション①	3.8	3.7	3.9	4.0
12	コミュニケーション②	4.2	4.0	4.3	4.4
13	コミュニケーション③	3.7	3.7	3.8	3.9
14	コミュニケーション④	3.9	3.8	3.9	4.1
15	探求力①	4.1	3.8	4.1	4.0
16	探求力②	3.4	3.3	3.4	3.6
17	探求力③	3.6	3.5	3.5	3.6
18	社会の一員としての自覚	3.9	3.7	3.9	4.0
19	リテラシー①	3.9	3.7	3.9	4.0
20	リテラシー①	4.1	3.8	3.9	4.0

さらに、1～20項目の自己評価の平均値を学年別にレーダーチャートのグラフにしたものが、以下の図である。

図 基礎体験の自己評価結果グラフ



(2) 卒業生からのアンケート結果（基礎体験活動における学びについてのコメント）

- ◇ 学校での学習支援活動を通して、一人一人個性が違う子どもにそれぞれどういったアプローチの仕方が良いのか学んだ。
- ◇ 地域の人や同期生と一緒に行事やイベントなどの企画（スタッフ）側を経験したことは、たくさんの出会いもあったし、何事も様々な視点をもてるようになった。
- ◇ いろいろな生活環境で育っている児童生徒に出会い、自分の視野を広げようと思うきっかけとなった。
- ◇ いろいろな世代の方と接する機会があったので、その方々とのコミュニケーション能力がついたと思う。
- ◇ 学校や幼稚園の1日の流れを大体把握することができた。また、年齢による特徴や学習でつまずきやすい所を知ることができた。
- ◇ 専攻別体験では自分たちで企画・運営をする機会が多く、配慮すべきことや計画書を作る上で必要なことを学んだ。直接子どもたちと接する機会も多かったため、安全管理の大切さや子どもたちが楽しむためには、まず自分から雰囲気を作ることの大切さを学んだ。
- ◇ 学習支援活動に参加をし、大学の講義だけでは実感を伴わなかった子どもの様子や支援の必要性を知ることができた。
- ◇ 子どもと関わる中で、難しいと感じたことについて自分なりに考えたり、教員の方に助言をいただいたりしたこと。
- ◇ 合唱団の活動では40代から70代の方々がおられ、幅広い年代の人と話す機会がもてコミュニケーション力・礼儀・マナーを学ぶことができた。
- ◇ 学校教育以外の「社会教育」という教育があり、学校教育だけでは育むことが難しい主体的な学びを生み出す働きかけがあることや、企画・立案の方法等の手法を学ぶことができた。
- ◇ 不登校の生徒を担当した際に、多様な個性の子どもたちと関わっていたことが自信になった。
- ◇ 教員間でのコミュニケーション等。積極的に周りに先生方に相談することができている。
- ◇ 障がいがある子どもたちと接する体験活動に参加していた。現在障がいがある子どもたちと接しており、言葉がけやパニックの対応に役立っている。
- ◇ 保護者とどのような姿勢で向き合っていけばよいのか、その関係づくりに役立っている。
- ◇ 大学時代の学習支援の活動で、先生方の授業を見せていただき、学習支援の仕方や子どもの接し方、授業の行い方などをまねさせてもらっている。
- ◇ 様々な活動でいろいろな学校の先生を見てきたので、実際に現場に入った時に職員室の空気や人間関係に早く馴染むことができた。
- ◇ 「子どもの前に立つことに慣れているね。」とたくさんの先輩方に言ってもらった。また、自分がどんなことを目指したいのか、考えをもって仕事ができている。
- ◇ 幼稚園の教諭として働くうえで、基礎知識をある程度もつことができた。
- ◇ 全てにおいて学校教育活動の指導に役立っている。特に生徒理解という点において、生徒に対する接し方が役立っている。

(3) 本学部卒業生の勤務校での評価

◎ 神奈川県S小学校 校長からの評価コメント

- ・困り感がある子どもへのかかわり方がきちんとできるのは、大学の臨床・カウンセリング体験領域によるところが大きいのではないかと。
- ・授業力を高めるために、校外外、特に校外の一流と言われている学校や講師・教員の下に出掛けさせ、授業力を高めるようにしている。これは、大学時代の体験でつくものではなく、実際に教員になって行くからこそ得るものが大きい。

・体験を積むことにこしたことはないが、責任ある立場に置かれて初めて活かされる体験もあるのではないかな。

（子どもたち（クラス・クラス以外）への関わり方）通知表の所見に秀でていた。子どものあり様を的確に捉えていた。多方面の中でのよさを見つけて文章化し、保護者に発信できていた。

（ふだんの授業及び教材開発への意欲）1学期は発問がファジーのため、子どもたちが何を問われているのか分からず、教師の意図が伝わらなかった授業が多かったが、夏休みの自己研修によって、2学期以降発問のメリハリ（シャープさ、洗練さ）が見られるようになり、子どもたちにも聞く姿勢が備わるなど大きく改善した。

（個性や魅力について）朝早く出勤し、教材の確認や、子どもたちの受け入れ準備を丹念にやる姿勢をもっている。

◎ 神奈川県T小学校 校長からの評価コメント

・学生時代にたくさんの学校現場を見ている経験は大きい。

・（1000時間体験のような活動を）受け入れることができる学校がうらやましい。

・教育実習の4週間では見えないことも多く、4月に大きなギャップを感じる先生方も多い。

・教育実習生に実習終了後、「いつでも学校に来てください。」と促しても、現実的には大学の授業があり、来ることができない。島根大学のようにカリキュラムを工夫しないと難しいことがよく分かる。

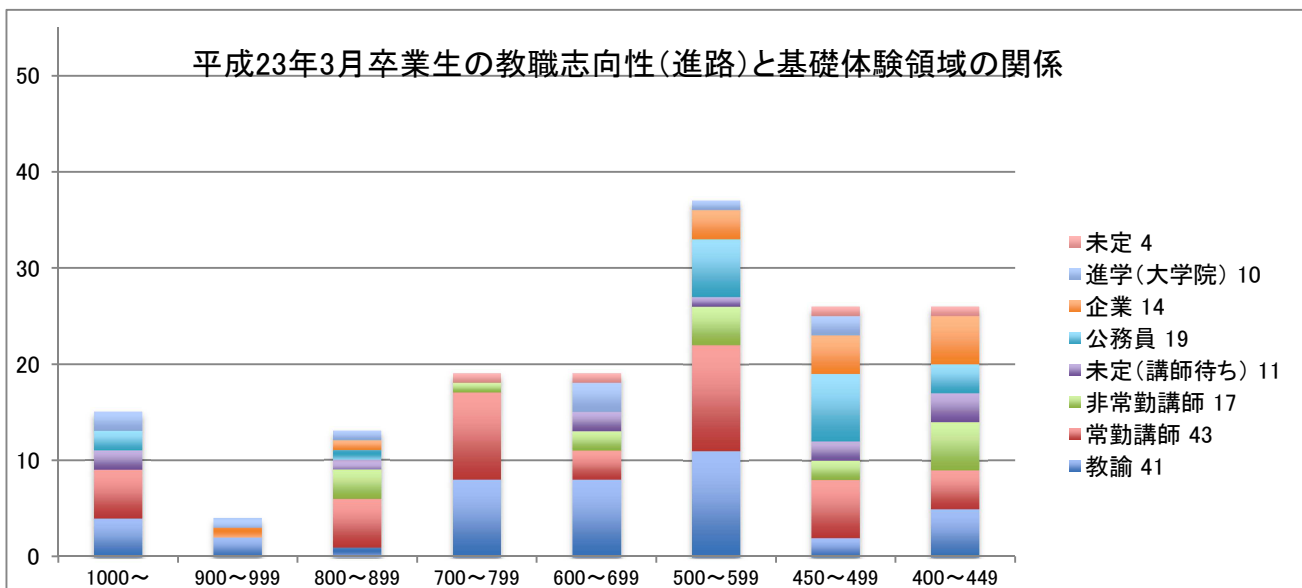
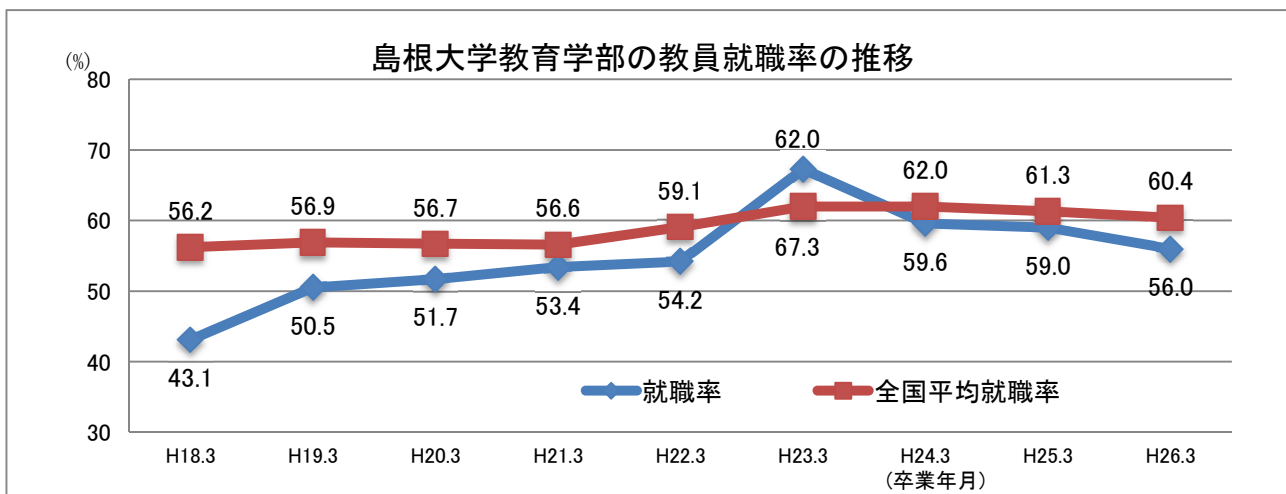
（子どもたち（クラス・クラス以外）への関わり方）笑顔で明るく対応できている。一人一人に前向きに、きちんと向き合っている。

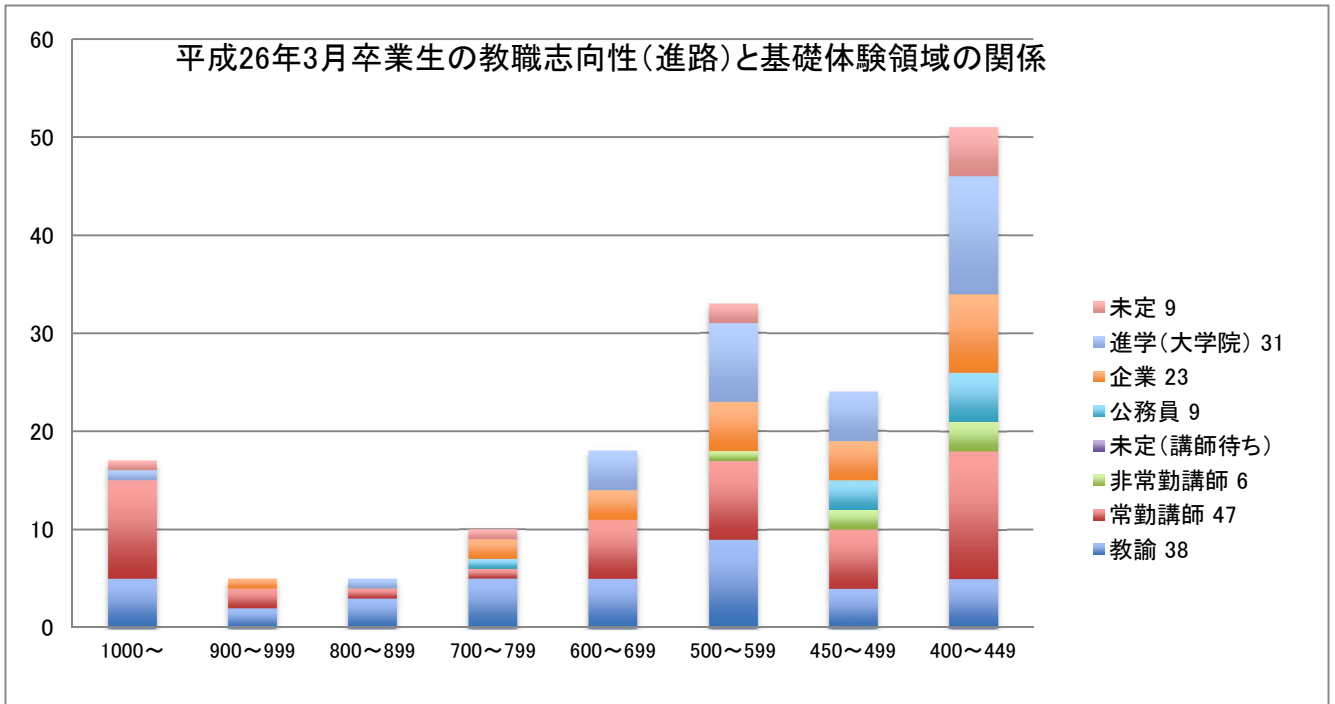
（組織的な対応力）自分で抱えきれない時には、同学年の先生や担当統括教諭に相談をしている。一人ではなく組織で動くことを自覚している。

（個性や魅力について）笑顔を絶やさず、積極的。軸がぶれない。弱音を吐かない逞しさ。先輩教員からの助言に対し、何を言わんとしているのか理解できている。

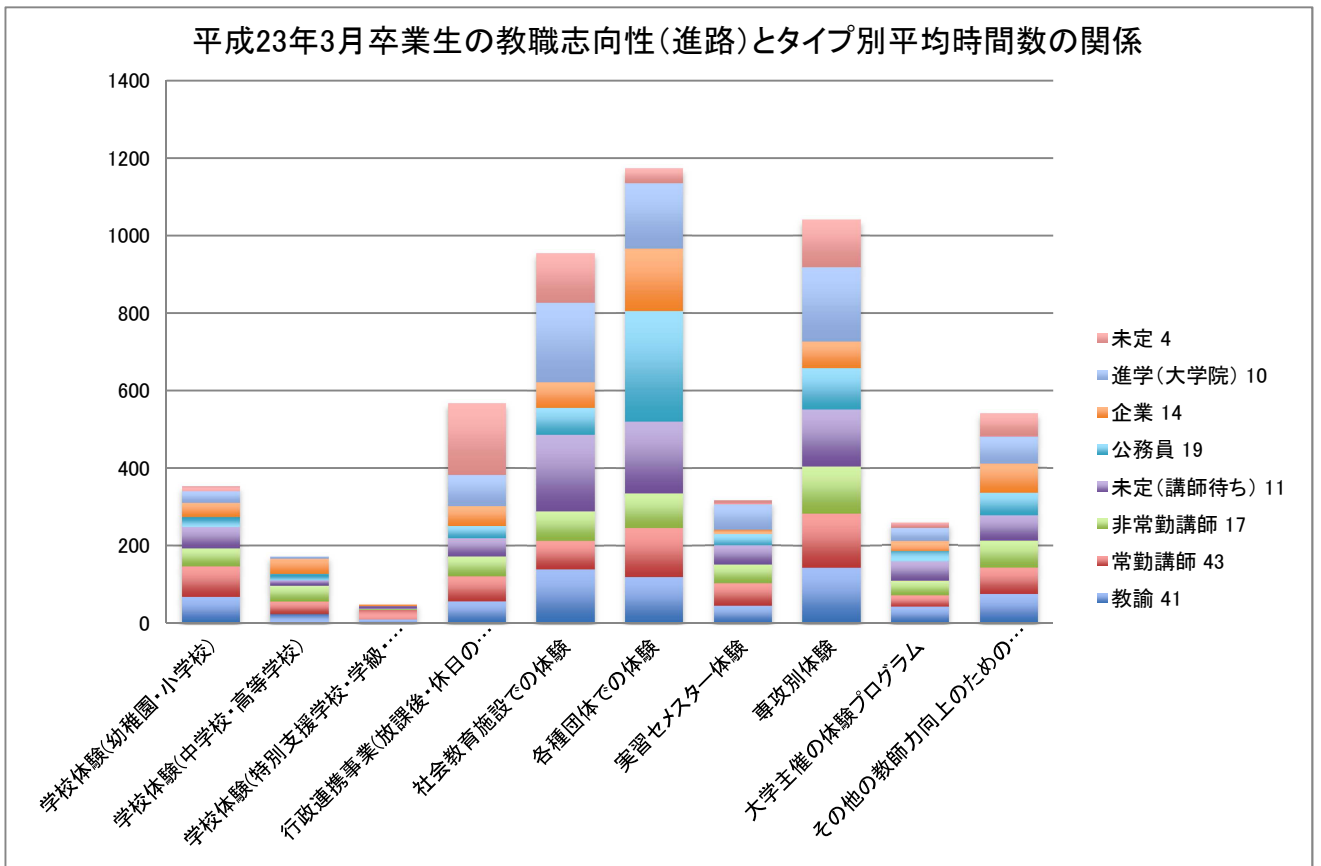
5. 基礎体験活動と教職志向性（進路）との関係

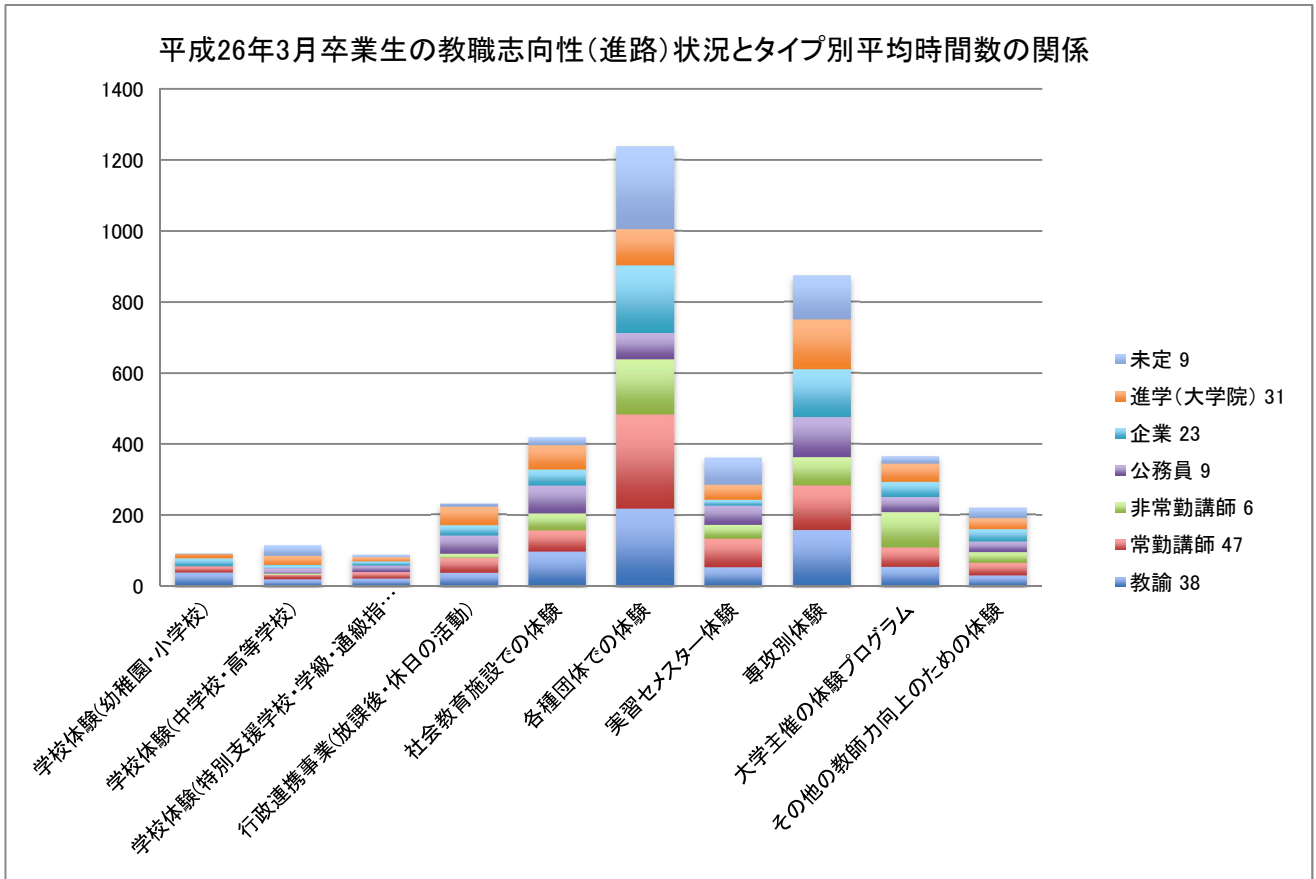
(1) 平成23年3月卒業生（159名）と平成26年3月卒業生（163名）の教職志向性（就職）と基礎体験時間数の分布





(2) 平成23年3月卒業生(159名)と平成26年3月卒業生(163名)の教職志向性(進路)とタイプ別平均時間数の分布





6. 基礎体験領域の成果と課題

<成果>

1. 体験学修の教師力育成カリキュラムとしての必修化と指導体制の構築

1000 時間体験学修を教師力育成のためのカリキュラムに組み込み、11 年間にわたり学生に多様な体験活動を提供してきた。毎年教育学部の定員 170 名全員に 400 時間を選択すべき時間（全学年で $400 \times 170 \times 4 = 272,000$ 時間）として課してきた。体験学修を入学生全員に対して必修化している大学・学部は他に存在しない。なお、卒業要件に組み込まれた「1000 時間体験学修」の時間数不足による卒業延期者は未だいないことは、指導体制が確立されているからこそである。

2. 地域との連携による多様な体験活動メニューの整備と地域貢献

基礎体験活動では、単に学校現場での体験のみならず、社会教育施設、地域における町おこし、子育て支援活動等も多くエントリーされている。教員としての幅広い資質を育てる活動を地域と連携する中で体験メニューとして整備可能な地域連携・地域貢献のシステムを構築した。

3. 教員養成に特化した学部の特徴ある4つの取り組み

「ポンチ絵1」で示すように、本学部の教員養成の特徴ある4つの取り組み（1000 時間体験学修、プロフィールシートシステム、面接道場、未来教師塾）が相互に連動し機能することにより、より実践力の高い卒業生を教育現場へ輩出することができた。

4. 教師力を高めることによる教職志向性の向上教員就職率の向上

教員への就職率（改組以前は全国ワースト5にまで落ち込んだ）は順調に回復し、人口の少ない山陰地方において、教員採用数が都会地と比較して一桁少ない現状であっても、教師力を高める取り組みを継続する事により、実践力の高い多くの学生を、教育現場へ輩出している。特に昨年度は現役合格者も 47 名と増え、常勤・非常勤講師を含めると教員就職者数は 101 名、教員就職率は 65.2%となった。

<課題>

1. 理論と実践の往還としての「専攻別体験活動」の内容・質の精査と、さらなる整備

本学部では「専攻別体験活動」という専攻の専門性を活かした、大学での学び（理論）と体験活動による実践を往還する仕組みを作ってきた。しかし近年、全体における専攻別体験の比率が増加することにより、社会教育体験など学外での有用な活動への参加率が低下する傾向にある。専攻別体験の内容・質の再検討が必要である。

2. 教師力、教職志向性を向上させるための選択体験メニューモデルの構築

これまで学生の自主性を尊重し、選択体験活動（400時間）のメニュー選びに特にルール化を行ってこなかった。従って、プロフィールシートでの自己評価とそれに基づく指導教員との対面での指導（自分の強い点・弱い点の確認や今後教師として必要な体験活動の同定など）は、あくまで学生が自己選択して選んだ体験活動に基づくものであった。教師力の育成の観点から、過去の先輩の活動の選択の仕方とそこで育った教師力の情報を提供するなど、活動選択においてある程度モデル化したものを提示する必要性について検討する必要がある。

3. 卒業生のフォローアップ（就職後に関わる調査・就職先のニーズへの対応等検討）

教員に就職した卒業生への追跡調査と就職先（勤務校）の管理職への教師力（教員としての実践力）についてのインタビュー調査をおこなうことによって「1000時間体験学修」の成果（他大学卒業生と大きく異なる島大ブランドの教員が持つ特質）をさらに検証する。